

幼児の社会性の発達に関する研究 (Ⅲ)

—— 就学前期より就学期にいたる発達を中心に ——

目 次

はじめに	1
I 研究の目的	2
II 研究の内容と方法	2
1 研究主題のとらえ方	2
2 研究仮説	2
3 研究方法	3
(1) 使用テスト	3
(2) 研究手順	5
(3) テスト実施期間	5
(4) 対 象	5
III 研究の結果とその考察	5
1 就学前期より就学期にいたる発達	5
(1) 各指標の年次別平均と相関	5
(2) 各指標の年次間変動	6
(3) 因子点と総合点の年次別平均	8
(4) 性格検査の結果について	9
(5) ま と め	10
2 幼児の精神発達と人格的傾向との関連	11
(1) 二つの検査の指標相互の相関	11
(2) 社会性発達の劣る幼児の人格的傾向	11
(3) 社会性発達の遅滞している幼児の人格的傾向	13
(4) 社会適応度の高低による幼児の人格的傾向	19
(5) ま と め	21
お しま い	21
参考文献	22

はじめに

この研究は、幼児の社会性の発達に関して、3か年にわたり継続的に追究してきた研究の、最終年次の研究内容をまとめたものである。第1年次（昭和39年度）・第2年次（昭和40年度）の研究については、紀要第50集・54集にまとめておいた。その内容を概略述べると、第1年次研究では、幼稚園・保育所に通う4～5歳児を対象に、幼児総合精神検査を行ない、その保護者に社会成熟度診断検査・親子関係診断テストを実施して、幼児の社会性や人格の発達に関する基礎的資料を得るとともに、その発達に影響を及ぼす要因について検討した。第2年次研究では、第1年次と同一の幼児（5～6歳児）をひきつづいて対象とし、再び幼児総合精神検査を行ない、その成長発達の経過をたどるとともに、さらに、ソシオメトリック・テストを実施して、幼児の集団適応の状況を把握し、社会性や人格の発達と集団適応との関連を検討した。これらの研究から明らかになったことは、幼児の社会性の発達には大きな個人差がみられること、その発達の様相に応じて、幼児の人格的側面の傾向も異なっていることなどで、結局、幼児の社会性の発達は、その人格的発達・人格形成と深いかかわりをもっていることを確かめた。

幼児の社会性ということを研究主題に取り上げた理由は、第1年次研究のはじめに述べておいたので、ここでは省略するが、その目的としてきたことは、人格的に未分化な幼児の発達の様相を、特に、社会性の側面に視点を置いて追究することにより、幼児の人格形成がどのように行なわれるものであるかを究明することであった。第1年次・第2年次の研究結果は、この目的を達するための基礎的資料を提供するものであったと思われるが、第3年次研究においては、これをひきついで、さらに深く、上記の目的を追究しようとしたものである。

第3年次研究の計画を具体的に述べると、第1年次・第2年次と同一の幼児（6～7歳児）を対象に、3回目の幼児総合精神検査を行ない、3か年にわたる検査結果から、幼児の社会性・精神発達の様相を把握するとともに、さらに、人格テスト（PFスタディ）を用いて幼児の人格構造を明らかにし、幼児の社会性・精神発達と人格形成との関連を検討・考察しようとするものである。なお、本年度は、対象幼児が小学校に就学し、大きな社会的経験をしているので、このことを研究の一つの観点として取り上げた。すなわち、就学前後の幼児の社会性・精神発達を比較・検討すること、就学期までに形成された幼児の人格を、就学後実施した人格テストで把握すること、そして、それらの関連を検討するということ、本年度の目標をおくものである。

この研究により、幼児のひとりひとりをいっそう深く理解することができ、その健全な発達を促す手がかりが得られるならば、この上ない喜びと思うのである。

I 研究の目的

幼児の社会性の発達に関する様相を把握・検討するとともに、その社会性発達の様相と人格形成との関連をも究明したい。

第3年次における具体的な研究目標は次のとおりである。

- 1) 3年間継続実施した3回の幼児総合精神検査結果から、幼児の社会性・精神発達の様相を把握・検討し、特に、就学前と就学後とを比較研究する。
- 2) 幼児の社会性・精神発達の傾向とその人格的傾向との関連をみるために、社会性発達の劣る幼児、および、社会性発達の停滞している幼児を取り上げ、その人格的傾向の特徴を検討する。
なお、人格的傾向を把握するためにPFスタディを実施する。

II 研究の内容と方法

1 研究主題のとりえ方

幼児の社会性ということについては、第1年次・第2年次研究で、その基本的な考え方を明らかにしておいたので、ここでは、主題をどのような観点でとらえ、研究をすすめるのかという意図についてだけ、ふれておきたい。

幼児の人格は、未分化であるといわれているように、成人の人格に比べて、著しい人格的側面の分化がみられず、いまだこんとん（混沌）とした状態にあるのが特徴である。したがって、幼児の社会性についても、幼児の人格を構成する重要な一側面ではあるが、その人格全体ときりはなして考えることは、とうていできなく、むしろ、幼児の人格の全体構造の中で考察をすすめていくのが妥当であると思われる。このような理由から、幼児の社会性の発達を、その総合的な精神発達の中でとらえるという取り組み方で、この研究を推進するものである。

具体的にいうならば、幼児総合精神検査で、幼児の知能・性格・社会性という各精神部面が測定されるのであるが、この検査の構成からみて、社会性といわれる部面の測定は、全精神能力部面（知能がこれを代表すると考えられる）の測定に比べて、設定された検査項目は少なく、かつ、全精神能力の検査項目のうちに含まれるものであって、社会性ということをも、第1年次・第2年次研究で述べたように、幼児が人間社会に適応するためにはたらかすいろいろな心的機能を総括したものであるとするならば、この検査で測定される総合的な精神能力（三つの精神部面を含めた）こそ、この概念にあてはまるものであり、したがって、この総合的な精神能力と、それをもっと限定した範囲でとらえた一つの精神部面（社会性の側面）との関連の中で、この主題を追究していきたいと考えるのである。

2 研究仮説

幼児は生活年齢の増加や集団生活の経験の増加とともに、しだいに、社会化されていくものであり、その社会化を促進する重要な経験の一つが、小学校に就学するということであると考えられる。就学前にすでに、幼稚園・保育所の集団生活を2か年あるいはそれ以上経験している幼児であっても、小学校に就学するという経験は、幼児の成長発達に、新たな多くの影響を及ぼすものと思われる。就学期に達した幼児に対する周囲の期待や、就学による社会的・知的刺激の増大などが、幼児をいっそう現実にして行動することを教え、その精神能力は、より合理的に具体的に発揮されるようになる。

また、いっばり、第1年次・第2年次研究の結果から、個々の幼児に関しては、その精神発達に大きな個人差がみられることが明らかであって、その発達の違いが幼児の人格的な傾向と関連をもつと考えられる。

以上のような考えから、次の仮説を設定する。

- 仮説1) 幼児の生活年齢の増加、および、社会化とともに、その精神能力はより具体的に表現され、検査の測定値を高めるであろう。
- 仮説2) 幼児の精神発達と人格的傾向との間に関連があるとすれば、社会性発達の劣る幼児においては、その人格に未熟な傾向がみられるであろう。
- 仮説3) 社会性の発達が停滞している幼児においては、その人格にかたよった傾向がみられるであろう。

3 研究方法

(1) 使用テスト

この研究で使用したテスト類は次のようなものである。

① 幼児総合精神検査*

(牛島義友・星美智子共著)

(注)* 各年次とも実施

この検査は、一つの検査を行なうことにより、知能の発達、性格の形成、社会性の発達をみることができるもので、この検査を構成している下位検査と、その中からくみ取られる精神部面をまとめて示すと表1になる。

知能の発達は、知能偏差値であらわされ、その質的構造をみるために、2通りの類型化が行なわれている。一つは、記憶、判断・推理の因子に分ける類型化で、他の一つは、言語・非言語・数の因子に分ける類型化である。

表1 幼児総合精神検査の構成

検査名	知 能			性 格	社 会 性
	記 憶	判 断 推 理	言 語 非 言 語 数		
A 立方体	○		○		
B 数反唱	○				
C 文章反唱	○		○		
D 絵画完成		○	○		
E 叙述		○	○	○	
F 定義		○	○	○	○
Ga 差異		○	○		
Gf 類似		○	○		
H 常識		○	○		○
I 語い			○		○
J 数		○	○		
K 計算		○	○		
L 言語推理		○	○		
M 絵合せ		○	○		
N 人物画			○	○	
生活技術					○
社会的能力検査					○
テスト場面の評定					○

性格の側面は、叙述・定義・人物画から分析されるが、叙述については、問題領域・欲求・プラス・トレージョン・異常反応の四つの分類にしたがって分析される。

社会性の発達は、社会的な生活能力指数 (S. Q.) と社会点 (検査場面における対人態度の評定得点) によって示される。社会点の評定項目は表2に示したとおりである。

表2 対人態度の評定項目

(1)	同伴者から	すぐ離れる	離れにくい	離れないで同伴者と入室したり、泣く	
(2)	質問に対し	すぐ答える	繰返しきかないと答えない	いつまでもだまっている	
(3)		よく考えて答える	ふつう	よく考えないで答える	
(4)		思っている事をうまく表現する	ふつう	表現力に乏しい	
(5)		ものがはっきり言える	ふつう	小さい声で話す 語尾がはっきりしない	
(6)	わからないとき	考えてからわからないという	すぐわからないという	だまってしまう	
(7)	言語	明瞭	ふつう	不明瞭、吃音、赤ちゃんことば	
(8)	態度	おちついている	ふつう	おちつきがない 気が散りやすい 部屋の中を歩きまわる つねに身体を動かしている あきやすい 洋服やまわりにあるものをいじる	
(9)	興味	興味をもち積極的	ふつう	興味がなく消極的	
(10)	緊張	ふだんと変わらない態度	ふつう	緊張している	
(11)	自信	自信にみちた態度	ふつう	自信がない態度	
(12)	動作	早い	ふつう	おそい のんびり 慎重	
			+	0	-

② PFスタディ (ローゼンツアイク著)

このテストは、日常普通にだれでも経験する欲求不満場面を線画によって示し、この場面をどのように解決するか被験者の反応によって、人格の傾向をとらえようとするものである。テスト場面は次の二つに大別される。

a) 人為的・非人為的な障害によって、直接的に自我が障害され欲求不満をひき起こしている場面

b) 他者から非難・詰問されて、いわゆる、超自我(良心)が障害され欲求不満をひき起こした場面

被験者の反応語の内容は、攻撃の方向と反応の型との二つの観点から、表3の分類により評定される。

この結果から、①GCR (Group Conformity Rating 社会適応度をみる)、②プロフィール (E・I・M・O・D・E・D・N・P の百分比により反応傾向をみる)、③超自我因子

表3 評点因子一覧表

型 方向	障害優位 (O-D)	自己防禦 (E-D)	要求固執 (N-P)
外罰的 (E)	E'	E E※	e
内罰的 (I)	I'	I I※	i
無罰的 (M)	M'	M	m

※はそれぞれE, Iの変型で超自我因子と呼ばれる。

($E-I$ ・ $E+I$ ・ $E-E$ ・ $I-I$ ・ $M+I$ の百分比により社会性・精神発達をみる)、④反応転移(前半と後半の反応の比較から、テストを受ける心構え、被験者の心理構造をみる)などについての分析を行ない、力動的に人格を把握するものである。

なお、上記のテストの結果を、この研究のおもな資料とするほかに、対象幼児の学習成績・行動・交友関係・家庭環境などに関する担任教師が調査した資料(教師報告資料とよぶ)を得ているので、これを参考資料として使用する場合もある。

(2) 研究手順

仮説1)については、幼児総合精神検査の3回の結果から、知能偏差値、社会的な生活能力指数、社会点などについて整理し、統計的に検討する。

仮説2)については、幼児総合精神検査による知能偏差値・社会的な生活能力指数・社会点と、P F スタディによるG C R %・超自我因子%との関連を調べ、さらに、社会性の発達程度別に下位群・普通群・上位群の3群を編成し、3群間の人格的傾向、および、標準値との差を比較・検討する。

仮説3)については、社会性の発達傾向別に上昇群・下降群の2群を編成し、各群ごとに標準値との差を比較・検討する。

(3) テスト実施期間

昭和41年9月～10月

(4) 対象

新潟市内小学校1年生52名(男子20名、女子32名)

なお、調査対象は第1年次・第2年次と同一の幼児であり、幼稚園・保育所の集団生活の経験を2年以上有するものである。

Ⅲ 研究の結果とその考察

1 就学前期より就学期にいたる発達

— 3回の幼児総合精神検査結果から —

幼児総合精神検査によって求められる知能偏差値・社会的な生活能力指数・社会点などを、幼児の精神能力発達の指標とし、これらについて分析・検討することにより、幼児の社会性、および、精神発達の様相を把握しようとする。

(1) 各指標の年次別平均と相関

表4は、知能偏差値、社会的な生活能力指数、および、社会点について、各年次の平均値とその前年次との差を示したものである。

この差について検定(t検定)した結果、*印を付した項目に有意差がみられた。この表から、知能偏差値は年次を追うにつれて、その平均値は高まっており、特に、第2年次から第3年次にかけての上昇が著しいことがわかる。また、社会点もこれとならんで、第2年次から第3年次にかけての上昇が

表4 各指標の年次別平均および差

指標	年次 類別	第1年次		第2年次		第3年次		年次間の 平均の差	
		男女別	全体①	男女別	全体②	男女別	全体③	②-①	③-②
知能偏差値	男子	47.1	498 (962)	50.4	51.7 (10.72)	55.5	56.6 (10.05)	* 1.9	** 4.9
	女子	51.5		52.5		57.4			
社会的 生活能力 指数	男子	90.1	1032 (2947)	100.3	103.9 (23.3 D)	107.0	108.5 (17.65)	0.7	4.6
	女子	111.1		106.1		109.5			
社会点	男子	0.6	1.3 (406)	0.9	1.4 (3.74)	2.9	3.1 (356)	0.1	** 1.7
	女子	1.8		1.6		3.2			

()内はSD **P<0.01 *P<0.05

著しくなっている。

表5は、各指標について、年次間相互の相関を求めたものである。

表5 各指標の年次間の相関

指標 \ 年次	①と②	②と③	①と③
知能偏差値 (A)	0.80	0.92	0.92
社会的 生活能力 指数 (B)	0.61	0.68	0.53
社会点 (C)	0.57	0.84	0.58

① ② ③ ……年次

表6 各年次の指標相互の相関

年次 \ 指標	(A)と(B)	(A)と(C)	(B)と(C)
第1年次	0.76	0.64	0.68
第2年次	0.88	0.82	0.74
第3年次	0.87	0.80	0.76

(A)(B)(C)……指標

表5から、各指標とも、年次間にかなりの相関のあることが認められるが、特に、知能偏差値についての相関が高い。このことから、個々の幼児の総合的な精神能力は、かなり確実にとらえられているものと考えられる。

表6は、各年次における指標相互の相関を求めたものである。この表から、各年次とも、指標相互の相関はかなり高いことが認められ、総合的な精神能力と社会性との相互の関連の高いことが示されているといえよう。

(2) 各指標の年次間変動

表7・8・9は、知能偏差値、社会的
生活能力指数、および、社会点について、それぞれの年次間の変動を示したものである。

表7 知能偏差値の年次間変動

変動の幅	第1年次～第2年次			第2年次～第3年次			第1年次～第3年次		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
0	0	1	1 (0.9)	1	1	2 (3.8)	1	3	4 (7.8)
+(1~5)	5 } 9	13 } 22	18 } 31 (59.6)	8 } 11	15 } 17	23 } 28 (38)	6 } 6	10 } 12	16 } 18 (34.6)
-(1~5)	4	9	13	3	2	5	0	2	2
+(6~10)	4 } 7	5 } 7	9 } 14 (26.9)	4 } 4	12 } 12	16 } 15 (30.8)	9 } 9	9 } 10	18 } 19 (36.5)
-(6~10)	3	2	5	0	0	0	0	1	1
+(11~15)	3 } 3	1 } 2	4 } 5 (9.6)	4 } 4	2 } 2	6 } 6 (11.5)	1 } 1	6 } 6	7 } 7 (13.4)
-(11~15)	0	1	1	0	0	0	0	0	0
+16~20)							2 } 2	1 } 1	3 } 3 (5.7)
-16~20)							0	0	0
+21~)	1 } 1		1 } 1 (1.9)				1 } 1		1 } 1 (1.9)
-21~)	0		0				0		0
上 昇(+)	13	19	32	16	29	45	19	26	45
下 降(-)	7	12	19	3	2	5	0	3	3
変動の差				**	**	**	**	**	**

数字は人数 ()内は% 全員に対する割合 **P<0.01

表8 社会的生活能力指数の年次間変動

変動の幅	第1年次～第2年次			第2年次～第3年次			第1年次～第3年次		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
0	0	0	0	0	2	2 (3.8)	1	1	2 (3.8)
+(1~10)	3 } 5	8 } 14	11 } 19 (36.5)	2 } 10	3 } 13	5 } 23 (44.2)	4 } 8	6 } 11	10 } 19 (36.5)
-(1~10)	2	6	8	8	10	18	4	5	9
+(11~20)	2 } 5	4 } 10	6 } 15 (28.8)	2 } 3	4 } 10	6 } 13 (25.0)	2 } 2	0 } 8	2 } 10 (19.2)
-(11~20)	3	6	9	1	6	7	0	8	8
+21~30)	3 } 4	1 } 4	4 } 8 (15.4)	4 } 5	6 } 6	10 } 11 (21.1)	2 } 2	6 } 6	8 } 8 (15.4)
-21~30)	1	3	4	1	0	1	0	0	0
+31~40)	4 } 4	0 } 1	4 } 5 (9.6)				2 } 3	1 } 4	3 } 7 (13.4)
-31~40)	0	1	1				1	3	4
+(41~)	1 } 2	1 } 3	2 } 5 (9.6)	2 } 2	1 } 1	3 } 3 (5.7)	4 } 4	1 } 2	5 } 6 (11.5)
-(41~)	1	2	3	0	0	0	0	1	1
上 昇(+)	13	14	27	10	14	24	14	14	28
下 降(-)	7	18	25	10	16	26	5	17	22
変動の差							*		

*P<0.05

表9 社会点の年次間変動

年次 変動の幅 類別	第1年次～第2年次			第2年次～第3年次			第1年次～第3年次		
	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体	男子	女子	全 体
0	4	3	7 (13.4)	1	5	6	2	1	3 (5.7)
+ (1～2)	1 } 5	6 } 12	7 } 17 (32.7)	12 } 12	16 } 18	28 } 30 (57.7)	5 } 6	10 } 15	15 } 21 (40.4)
- (1～2)	4	6	10	0	2	2	1	5	6
+ (3～4)	7 } 7	7 } 11	14 } 18 (34.6)	4 } 5	6 } 7	10 } 12 (23.1)	5 } 7	7 } 10	12 } 17 (32.7)
- (3～4)	0	4	4	1	1	2	2	3	5
+ (5～6)	1 } 4	1 } 2	2 } 6 (11.5)	1 } 1	2 } 2	3 } 3 (5.7)	3 } 3	1 } 2	4 } 5 (9.6)
- (5～6)	3	1	4	0	0	0	0	1	1
+ (7～8)		0 } 2	0 } 2 (3.8)	1 } 1		1 } 1 (1.9)	2 } 2	3 } 4	5 } 6 (11.5)
- (7～8)		2	2	0		0	0	1	1
+ (9～10)		1 } 2	1 } 2 (3.8)						
- (9～10)		1	1						
上 昇(+)	9	15	24	18	24	42	15	21	36
下 降(-)	7	14	21	1	3	4	3	10	13
変動の差				**	**	**	**	*	**

**P<0.01 *P<0.05

この変動に関し、上昇したものと下降したものの差(人数)について検定(χ^2 検定)した結果、各表の*印を付した項目に有意差がみられた。これらの表から、知能偏差値と社会点については、第2年次から第3年次にかけて上昇したものが多いたことがわかる。

(3) 因子点と総合点の年次別平均

表10は、幼児の精神発達を質的構造からみるために、各因子別に平均得点を求め、総合点とならべて示したものである。

ここでは、試みに、各因子の平均得点から年次間の得点差を求め、これを手引書による標準得点差で除し、標準に対する発達の度合い(仮に発達指数とよぶ)をみるとともに、どの年次間の発達が著しいか、発達指数の比を求めた。

この表から、各因子とも、年次間の発達は標準を上まわっており、発達の度合いの大きいことがわかるが、第1年次・第2年次間と、第2年次・第3年次間の2者を比べるならば、因子によって、その発達の度合いに差のあることがわかる。この2者の比により、発達の度合いの大きい順を各類型別に示すと次のようになる。

- 1) 判断 > 推理 > 記憶
- 2) 数 > 言語 > 非言語

第1年次・第2年次間の発達よりも、第2年次・第3年次間の発達の方が上まわっているものは、1)の類型では判断、推理であり、2)の類型では数、言語である。両者をあわせて比較すると、次のようになる。

表 10 因子点と総合点の年次別平均および発達指数

項目 因子	因子点平均			年次間差		標準点差		発達指数		指数の 比 $\frac{b}{a}$
	① 第1年次	② 第2年次	③ 第3年次	a ②-①	b ③-②	a' ② -①	b' ③ -②	④ $\frac{a}{a'} \times 100$	⑤ $\frac{b}{b'} \times 100$	
記憶	20.17	25.73	31.27	5.56	5.56	3	3	185	185	1
判断	22.50	30.11	39.75	7.61	9.64	6	6	127	160	1.26
推理	25.17	31.67	38.96	6.50	7.29	4	4	162	182	1.12
言語	38.02	48.75	63.07	10.73	14.32	8	8	134	179	1.34
非言語	26.36	26.65	32.30	6.29	5.65	4	4	157	141	0.89
数	9.23	11.40	14.73	2.17	3.33	2	2	108	166	1.53
総合点	72.34	93.82	115.69	21.48	21.87	18	14	119	156	1.31

数 > 言語 > 判断 > 推理

なお、それらの因子を含む総合点においても、第2年次より第3年次にいたる間の発達の数値が大
きくなっていることがわかる。

(4) 性格検査の結果について

(1), (2), (3)で述べてきたことは、主として知能・社会性に関する結果であるが、同じ検査で同時に測
定される性格検査については、どのような結果がみられるであろうか。参考までに、ここでは図版の叙
述のみを取り上げ、全体の数量的な変化について検討してみる。

表11は、6枚の図版の叙述について、その反応内容を項目別に集計したものである。表12は、どのよ
うな叙述のしかた（叙述形式）をするかについて、便宜的に四つの形式に分類したものである。

表11 叙述内容における項目別反応の年次別出現数

項目 年次	a (問題領域)							b (欲求)				c (フラス トレイション)			d (異常反応)							
	(1) 生 産	(2) し つ け	(3) 物 物	(4) 規 則	(5) 道 徳	(6) 人 間	(7) 自 我	(1) 社 会	(2) 独 立	(3) 知 的	(4) 不 安	(1) 攻 撃	(2) 逃 避	(3) 意 意	(1) 不 満	(2) 執 行	(3) 拒 否	(4) 劣 等	(5) 孤 立	(6) ひ ね れ	(7) 不 安	(8) 不 安
第1年次	1	4	10	1	5	41	14	12	6	2	22	3		8		7	1	2				
第2年次	3	15	3	3	3	64	13	19	9	8	1	37	6	1	13	1	1		1			2
第3年次	5	16	13	5	11	72	18	31	10	4	54	19	1	31	1	1	2	4				1
年次間の差	*				*	*					****			**								

***P < 0.01 *P < 0.05

表12 叙述形式の年次別推移

叙述形式 年次	①	②	③	無回答
第1年次	39	13	0	17 (Q5)
第2年次	21	29	2	15 (Q4)
第3年次	5	33	14	5 (Q)
年次間の差	**	*	**	*(**)

(注)

- 叙述形式 ①………枚挙的 三つ以上の列挙,または不完全な叙述
- ②………叙述的 完全な叙述,または不完全な叙述が二つ以上
- ③………解釈的 絵全体のまとまりをもち想像によって物語の肉づけがされているもの

()内は場面数 ** $P < 0.01$ * $P < 0.05$

無回答は、無答とわからないと答えた場合の両方を含める。

それぞれの表の各項目について、3年次間の差を検定 (χ^2 検定)した結果、米印を付した項目に有意差がみられた。表11から、問題領域の(2)しつけと(6)人間関係に、欲求の(1)愛情に、フラストレーションの(1)不安と(2)攻撃に、異常反応の(2)不満に、それぞれ有意差がみられ、これらの項目については、年次を追うにしたがい、反応の出現数が多くなっていることがわかる。また、表12から、叙述の形式は、年次を追いつれ、分類①と無回答の人数が減り、②と③が増加していることがわかる。このように、幼児の精神発達にともない、叙述形式は①から③に進んで、叙述内容が豊富になり、したがって、各項目に該当する反応数も増加するという結果になったものと思われるが、それにしても、しつけや人間関係の項目に該当する反応が多くあらわれてくるのは、幼児をとりまく生活が、図版を媒介に具体的に表現される結果とみられよう。その人間関係についての反応では、特に、母子関係がおもにあらわれており、それにもなって、愛情の欲求やフラストレーション傾向が、かなり多く出現するものと思われる。

(5) ま と め

同一の幼児について、3か年にわたり継続的に測定した検査結果から、幼児の社会性・精神発達の様相を把握しようとしたものであるが、以上の結果から、就学前後3か年における幼児の社会性・精神発達は、就学前に比べ就学後に、より発達の著しいことが明らかになった。これは、総合的な精神発達の指標と考えられる知能偏差値や社会点の平均値の差、あるいは、変動の傾向からいえるのであって、その著しい発達に寄与しているのが、就学という条件であると考えられる。(3)で調べたように、精神能力の発達を因子別に比較した場合、就学という条件が加わった第3年次において、発達の数値がより大きいのは、数・言語・判断・推理などの因子で、これには、幼児の生活年齢の増加にもなる自然な発達に加え、学校教育の影響が及んでいると考えられるからである。就学による知的・社会的刺激の増大は、幼児をいちだんと社会化し、それにもなって、その精神能力は、現実の要求する課題にできるだけ即応したかたちで発揮される結果、検査結果の測定値が高まるものと思われる。結果として、仮説1)は採択されるものとする。

2 幼児の精神発達と人格的傾向との関連

— 幼児総合精神検査結果とPFスタディ結果との関連 —

同一の対象幼児に、同時期に実施した二つの検査結果から、主として、幼児の精神発達と人格的傾向との関連をみようとするものである。

(1) 二つの検査の指標相互の相関

表13は、幼児総合精神検査から求められた知能偏差値・社会的な生活能力指数・社会点と、PFスタディの反応結果から求められたGCR% (社会適応度)・超自我因子M+I% (社会性・精神発達)との相関を求めたものである。

この表から、GCRについては、知能偏差値との間に相関がみられ、M+Iについては、知能偏差値、社会的な生活能力指数、および、社会点とそれぞれ相関のあることがわかる。

これらの結果により、二つの検査結果から求められる全体的な傾向としては、幼児の精神発達と社会適応性・人格の成熟性に関して関連があるといえよう。

表13 二つの検査の指標間の相関

幼児総合 PF	知能偏差値	社会的な生活 能力指数	社会点
G C R	0.42	0.29	0.26
M + I	0.52	0.48	0.44

(注) n = 37 GCR 63% (標準値+標準偏差) 以上のものを除く。なお、GCR 63% 以上の幼児については、(4)で分析を試みる。

(2) 社会性発達の劣る幼児の人格的傾向

表15は、社会性発達の劣る幼児の人格的傾向を把握するために、対象幼児を、社会的な生活能力の発達程度を基準に次の3群に分け、人格的傾向を比較したものである。

社会性の劣る幼児群…… 3か年間をとおして、社会的な生活能力指数の平均値が低い幼児 (-1・-2の段階に含まれるもの表14参照)で、第3年次においてもS.Q.90以下であるもの
(6名)

社会性のまさる幼児群…… 3か年間をとおして、社会的な生活能力指数の平均値が高い幼児 (+1・+2の段階に含まれるもの)で、第3年次においてもS.Q.120以上であるもの
(7名)

社会性が普通の幼児群…… 3か年間をとおして、社会的な生活能力

(以下、普通群とよぶ) 指数の平均値が中位にある幼児—調査対象から下位群・上位群に属する幼児を除いたもの

表14 社会的な生活能力指数段階

段階	S. Q.
+ 2	140 ~
+ 1	116 ~ 139
0	91 ~ 115
- 1	68 ~ 90
- 2	~ 67

(39名)

表15 発達程度別3群の比較

検査 指標 項目 人数 群	幼児総合精神検査									P F スタディ													
	S. Q.			知能偏差			社会点			GCR %	プロフィール %						超自我因子 %						
	一年次	二年次	三年次	一年次	二年次	三年次	一年次	二年次	三年次		E	I	M	O I D	E I D	N I P	E	I	E + I	E I E	I I I	M + I	
	6	62.8	68.3	82.6	35.3	32.6	39.1	-3.3	-4.5	-1.8	** 25.4	65.3	19.2	15.3	28.6	47.9	23.4	5.6	2.8	8.3	25.5	6.6	18.1
下位群	6	62.8	68.3	82.6	35.3	32.6	39.1	-3.3	-4.5	-1.8	** 25.4	65.3	19.2	15.3	28.6	47.9	23.4	5.6	2.8	8.3	25.5	6.6	18.1
普通群	39	102.2	103.6	108.8	50.1	52.3	57.4	1.4	1.5	3.0	54.2	40.5	26.2	33.1	23.2	50.5	29.4	4.9	4.4	9.4	14.2	11.9	37.5
上位群	7	143.7	135.7	129.0	60.0	64.4	67.4	5.0	6.0	7.5	52.4	38.6	28.2	33.0	21.4	50.8	27.6	5.0	8.3	13.3	13.0	11.0	41.3
3群間の差	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

群別欄の*印は標準値との間に有意差あり **P<0.01 *P<0.05

この表から、下位群については、社会的な生活能力指数に差がみられるだけでなく、知能偏差値や社会点についても有意差（ χ^2 検定）がみられ、他の2群に比べて、知的にも、対人態度においても劣っていることがわかる。

PFスタディの反応についての3群間の比較では、下位群はGCR%（社会適応度）が低くなっており、E%（外罰的反応）が高く、M%（無罰的反応）、および、超自我因子M+I（社会性・精神発達）が低くなっている。標準値（表16参照）との比較では、下位群のGCR%に有意差がみられた。これにより、社会性の劣る幼児（下位群）は、世間並みの常識的な適応のしかたを、身につけていないといえよう。その人格構造は、他の2群に比べて、攻撃を外に向ける傾向が強く、妥協しようとする傾向の少ないことを示している。すなわち、欲求不満場面に遭遇した場合、その原因を他人とか環境のせいにして、相手を非難・攻撃するということになり、その原因を許容すべき事柄として、忍耐することのできない人格である。また、超自我の発達もいちだんと劣り、自他を弁護することのできる社会成熟度は低い。したがって、社会性の劣る幼児は、全体として、その人格構造・精神構造に未熟性を示しているといえる。

表16 小学校1・2年（6～7歳）の標準

項目	評点因子 (頻数)									GCR %	プロフィール %						超自我因子 %					
	E'	E	e	I'	I	i	M'	M	m		E	I	M	O I D	E I D	N I P	E	I	E + I	E I E	I I I	M + I
標準	1.8	6.0	4.7	1.4	3.8	0.5	1.5	2.7	2.1	5.2	5.2	2.4	2.4	2.0	5.0	3.0	5	4	9	2.0	1.2	2.8
(SD)	1.0	3.0	1.6	1.0	2.3	0.5	1.7	1.6	1.4	1.0	1.6	0.9	1.0	1.2	1.3	1.0	0.6	0.4	0.6	1.3	0.8	1.3

なお、参考までに、下位群の各評点因子別出現頻数の平均をみると、表17のようになる。表16の標準値に比べると、E'（外罰方向障害優位型反応）・E（外罰方向自己防禦型反応）が高く、I（内罰方向自己防禦型反応）・M（無罰方向自己防禦型反応）・m（無罰方向要求固執型反応）が低くなっており、特に、E'の反応の低いことが特徴的である。このことから、下位群の全体としての傾向に、E%が高

くでていることには、E' が大きく関与していることが考えられ、不満場面に遭遇した際、単なる不平・失望に終始しやすく、問題の解決にまで向かうことができない未熟性を示しているといえよう。

また、教師報告資料によると、下位群の学習成績は、5段階評価で1・2が大部分を占め、行動評価も3段階評価でC・Bが大部分を占めている。交友関係については、ほとんどが、あまり友だちがいない・友だちに好かれぬ・友だちと遊ぼうとしないという状態である。前年次実施したソシオメトリック・テストの結果でも、孤立児という状態であったが、就学後もその状態から前進していないといえよう。

(3) 社会性発達の停滞している幼児の人格的傾向

表18は、前記普通群に属する幼児のうち、3年間に於ける社会的な生活能力指数の変動の著しい幼児について、発達傾向別に、次の2群を編成し、各群ごとに、その人格的傾向をみたものである。

S.Q.の上昇した幼児群………社会的な生活能力指数が、第1年次・第2年次に比べ、第3年次にいたつ(以下、上昇群とよぶ) て著しく上昇したものである。

S.Q.の下降した幼児群………社会的な生活能力指数が、第1年次・第2年次に比べ、第3年次に著しく(以下、下降群とよぶ) 下降したものである。

表18 発達傾向別2群の人格傾向

検査 指標 項目 群 人数	幼児総合精神検査									PFスタディ												
	S. Q.			知能偏差値			社会点			G C R %	プロフィール %						超自我因子 %					
	一年次	二年次	三年次	一年次	二年次	三年次	一年次	二年次	三年次		E	I	M	O D	E D	N P	E	I	E + I	E E	I I	M + I
	←	*	→																			
上昇群 5	94.4	100.8	130.4	54.0	58.4	67.8	2.4	1.4	5.2	55.0	38.7	26.6	34.5	17.0	45.4	37.5	4.1	5.4	9.5	14.1	10.0	4.0
下降群 2	128.0	90.0	78.0	47.0	43.5	47.0	2.0	1.0	-0.5	60.4	33.3	34.3	32.2	11.4	46.8	41.6	4.2	6.2	10.4	8.3	15.6	38.5

← * → 年次間の有意差 * 標準値との間の有意差 ** P<0.01 * P<0.05

この表から、両群とも、知能偏差値と社会点については、年次間の変動に有意差 (χ^2 検定)がみられなかったが、社会的な生活能力指数の年次間の変動には有意差がみられ、それぞれの群におけるS.Q.の上昇傾向、および、下降傾向が明らかに認められる。

各群のPFスタディの反応を標準値と比べると、上昇群には、有意差のある項目はなく、下位群のE% (外罰的反応)・超自我因子E-E% (攻撃傾向)に有意差がみられた。すなわち、社会性発達が停

滞し、下降傾向をたどる幼児には、攻撃を直接外に向ける外罰的反応、あるいは、素朴な攻撃傾向が非常に少なく、社会に適応するために必要と考えられる適度な攻撃すらなしえないといえる。

下降群の条件に該当し選定された幼児は、わずか2名であるため、上述の結果で結論を下すことはむずかしいと思われる。そこで、この2名について、事例研究を行ない、具体的に明らかにし、補足することにした。

<事例1> 7歳4か月の男児

(1) 生育歴

(出生時)正常 (発育)普通 (栄養)人工栄養 (病気)なし (身体)やせすぎ

(2) 家庭状況

母親と本児のみの生活保護家庭、母親に肺結核の病歴がある。現在、ある仕事に従事しているようであるが、その勤務先はつまびらかでない。夜でも、本児をひとりで留守番させておくという状態である。

(3) 諸検査結果

①親子関係診断テスト(第1年次実施)

母親の本児に対する態度に、積極的拒否の傾向が著しい。

②社会成熟度診断検査(第1年次実施) S. Q. 152 (優の段階)

③ソシオメトリック・テスト(第2年次実施)

成員31名の組集団において、孤立児(被選択0, 被排斥23)であり、排斥される理由は、はたく・泣かず・こわす・いじめる・乱暴などであり、とかく、仲間から「きられる」存在である。

④幼児総合精神検査(第1年次・第2年次・第3年次実施)

表19

指標	年次	第1年次	第2年次	第3年次
知能偏差値		47	44	49
S.Q.		120	96	88
社会点		3	2	2
性格		異常反応 拒否2 人物画 フラストレーション1	人物画 フラストレーション1	人物画 フラストレーション1
叙述内容 (1, 2... 6 は図版番号を示す)		1... このさるないている、いじめられて…… 2... ひとりがたべないでいる、ごはんいやだって…… 3... おもちゃことみてるよ 4... みはりばんしている、どろぼうがこないよ…… 5... 子どもにミルクもってきなさいといったら、いやだいやだといっているの、わるい子だから…… 6... わるい子になったから、ろくにやに入れたの……	1... この人のこと、よせたらといっている 2... たべきなさいといっていると、おわってしまうから…… 3... かってあげるといってやると 4... へやにはいって、ねると 5... ミルクもってきなさいといっていると…… 6... おこられたとこ、いい子は遊んでいる	1... あそんで、あの子よしてやろうと思ってるよ 2... これから、さるがたべようとしている 3... あれかってといっていると、みてるよ 4... 夜のとき、立ってるの 5... ちょっとおいでっていつている 6... しかられたから、こういうとこにはいつているの

⑤ P F スタディ (第3年次実施)

(解釈)

表20 プロフィール

型 方向	O-D	E-D	N-P	計%
E	0.5	2.5	5.5	35
I	2	6	1	38
M	1	1	4.5	27
計%	15	40	46	

GCR = 63%

超自我因子

$\underline{E} = 0\%$
 $\underline{I} = 13\%$
 $\underline{E} + \underline{I} = 13\%$
 $\underline{E} - \underline{E} = 10\%$
 $\underline{I} - \underline{I} = 13\%$
 $\underline{M} + \underline{I} = 40\%$

反応転移

1. none
 2. $\underline{I} + 0.33$
 3. $\underline{e} + 0.45$
 4. none
 5. none

1. GCR%が標準値に比べて著しく高く(標準値+SD以上),この年齢の子どもの正常な適応の範囲から逸脱している。GCR評点と合致を示した15のうち,超自我阻害場

面の合致が3.5あり,そのすべてがI反応であることから,かなり強い自責の念を抱いて適応しようとしていることを示す。これは,健全な適応のしかたとはいえない。

2. プロフィールをみると, E%が著しく低く(標準値-SD以下),これは,特に,他を非難・攻撃して自己を強調する(E)ことを,極度にひかえることによるものと考えられる。しかも, I%が著しく高く(標準値+SD以上),必要以上に自罰的な気持が強いことがうかがわれる。しかし,庇護・救援の気持もかなり強く(e),いっぽう,不満を抑圧・忍耐する気持(m)も著しく強い。また,超自我因子のI%の高いことから,自己を弁護する傾向もかなり強いことがわかる。

3. 反応の転移では,自罰的な気持のIから後半遠ざかろうとしている傾向がうかがわれる。また,前半は「自分の不満を満たしてほしい,かばってほしい」という反応eを強く示していたが,後半はそれを表明することを避けている傾向がみえる。

(4) 教師報告資料より(第3年次の状況)

① 学習成績

国語1 社会3 算数2 理科3 音楽2 図工4 体育3

② 行動評価

基本的な生活習慣C 自主性B 責任感B 根気強さB 自省心C 向上心B
 公正さB 指導性B 協調性B 同情心B 公共心C 積極性A 情緒の安定C

③ 交友関係

誰とでも遊ぶが,学校のきまりや社会のきまりを破るので友だちにいやがられることがある。

④ 性格

短気 きかん坊 気持が安定していない

(5) 総合的考察

本児の人格構造については,第3年次実施のPFスタディの結果にあらわれているように,自分の不満を満たしてほしい,かばってほしい,依存したいなどの基本的な欲求をもっていながら,自己を強調することはしないで,自罰的に,それを極度に抑圧することにより適応していることとする,抑圧機制的働いていることが明らかになった。

幼児総合精神検査による3か年の性格検査の結果からも,このような人格構造を示すにいたった経過がうかがわれる。第1年次から第3年次までの叙述内容の移りかわりをみると,年次の進むにつれ,図版の情景叙述に感情の表出が少なくなって,説明的になっている。すなわち,第1年次の叙述には,

「いやだいやだといって……，わるい子だから……，わるい子になったからうやにいれられたの」など，図版の情景に自己を投影して，その感情をいくらか表出しているのに比べ，第2年次・第3年次では，図版全体にわたり単なる説明に終始し，「……あの子よしてやろうと思ってるよとこ，……しかられたからこういうところにはいるの」など，感情の表出は最小限にとどめられている。しかし，3年間とおして一貫していることは，「……わるい子だから，……わるい子になったから……」（第1年次），「……おこられたよとこ，いい子は遊んでいる」（第2年次），「……しかられたから……」（第3年次），といった表現にみられるように，自分を，わるい子，おこられ・しかられるべき子として意識し，自分をその状態におくことに抵抗を感じていないようにみえる態度である。このことは，PFスタディの結果にみられる自罰的態度につながるものと思われる。しかも，PFスタディの結果にみられた，自分の不満を満たしてほしいという基本的欲求は，「おもちゃよとこみてるよとこ」（第1年次），「……かってあげるといってやるとこ……」（第2年次），「あれかってといってるよとこ，みてるよとこ」（第3年次）というような表現で，積極的表出を避け，それを抑圧しているばかりでなく，「……この人よとこよせたらいっている……」（第2年次），「あそんで，あの子よしてやろうと思ってるよとこ」（第3年次）という表現にみられるように，しいて，社会的に認められる行為をとろうと意識していることがうかがわれるのである。

先生や，組集団からみた本児の現実の姿は，第2年次のソシオメトリック・テスト結果にみられるように，乱暴なため，皆にきらわれる存在であり，小学校でも，だれとでも遊ぶが，学校のきまりや社会のきまりを破るので，友だちにいやがられることがあるということで，人格テストの結果とは，うらはらの様相を呈している。

本児をとりまく人々のみる現実の姿も，人格テストの結果も，本児の人格を反映しているものとすれば，このうらはらの矛盾した両面をあわせたものこそ，本児の真の人格を示すものであり，その人格構造の特色を示すものといえよう。そして，このような人格形成を招来した原因は，本児の家庭状況から推測される，恵まれない家庭，および，親の愛情の欠如にあると考えられるのである。

<事例2> 6歳8か月の女兒

(1) 生育歴

(出生時) 正常 (発育) 良い (栄養) 混合栄養 (病気) 肺炎 (身体) 普通

(2) 家庭状況

父・母・兄・本児の4人家族。父母共に働いているため，カギッ子である。

(3) 諸検査結果

① 親子関係診断テスト (第1年次実施)

父親の態度には，消極的・積極的拒否，厳格，干渉・不安，溺愛・盲従，矛盾不一致の傾向がみられ，母親の態度には，消極的・積極的拒否，矛盾不一致の傾向が著しい。

② 社会成熟度診断検査 (第1年次実施) S.Q. 73 (劣の段階)

③ ソシオメトリック・テスト (第2年次実施)

成員31名の集団において，孤立児 (被選択0，被排斥3) であり，他から排斥される理由は，へ

んなことをいう・ウソいったりする・遊ばないなどであり、集団の成員から、あまり関心をはらわれない存在である

④ 幼児総合精神検査（第1年次・第2年次・第3年次実施）

表21

年次 指標	第1年次	第2年次	第3年次
知能偏差値	47	43	45
S Q	136	84	68
社会点	1	0	-3
性格	人物画 フラストレーション1 不安定 1	人物画 フラストレーション1 不安定 1	
叙述内容 (1, 2…… 6は図版番号を示す)	1 遊んでると、おさるがねみえないの、おめめしっかりおさえているの 2 おさるがいすにすわって何かたべるとこ 3 お店やさんが何がいかみているの 4 夜になったら、ひとりで立っているの、お外寒いからそれからお家へ入りたくないから… 5 赤ちやん、お母さんにだっこされているの… 6 おさるさんがショー-ととびおりのたの…	1 遊んでるとこ 2 ごはんたべてるとこ、もうひとりのさるがきたんだ… 3 さるがお母さんとまちへいった、何かみえた、何かかったの 4 夕方、さるがでているの 5 お母さんが赤ちやんみてるの 6 つな遊びと、さるさんが木にのぼってる、さるさんが木の家にいる	1 おはなししている 2 ごはんたべている 3 何かかおうとしている、小さい子がみている 4 (無答) 5 お母さんが子守りしている、お見ちやんきたの 6 3人のさるが一人を木のろうやに入れて、3人の子が遊んでいる

⑤ PFスタディ（第3年次実施）

(解釈)

表22 プロフィール

I. GCR%は、標準値に比べて高く、一応、普通以上の適応性を示しているかにみえる。しかし、GCR評点と合致を示した7つのうち、4つまでMとmであり、年齢相応とはいえない妥協的態度がうかが

型 方向	O-D	E-D	N-P	計%
E	1	35	3	31
I	1	45	2	31
M	0	5	4	38
計%	8	54	38	

GCR = 58%

超自我因子 反応転移

$\underline{E} = 8\%$ 1. none
 $\underline{I} = 0\%$ 2. $\underline{I} + 0.56$
 $\underline{E} + \underline{I} = 8\%$ -0.60 M
 $\underline{E} - \underline{E} = 6\%$ 3. none
 $\underline{I} - \underline{I} = 19\%$ 4. $\underline{E} + 0.33$
 $\underline{M} + \underline{I} = 38\%$ 5. none

われる。

2. プロフィールでは、E%が著しく低く（標準値－SD以下）、社会に適応するために必要な適度な攻撃性すら備えていないように見える。いっぽう、I%、および、M%は高く、特に、M、mの多いことから（標準値＋SD以上）、過度に自己を抑圧し、忍耐する気持ちの強いことがうかがわれ、外界に対しては、無関心なまでの妥協的態度と受け取れる。反応語に、「（ウソいって）許してよ」、「なんにもしてないよ（……とウソつく）」などの表現がみられることから、心の深層では、愛情を失うことをおそれ、ことさらに妥協しようとしている様子うかがわれる。
3. 反応の転移では、前半Iが多くでていたものが、後半Iから速ざかり、Mに転じていることから、不満に対する非難を他人にも自分自身にも向けず、抑圧することで、妥協してしまおうとしていることがうかがわれる。また、後半Eからも速ざかっている。

(4) 教師報告資料より（第3年次の状況）

①学習成績

国語2 社会2 算数2 理科3 音楽3 図工2 体育3

②行動評価

基本的な生活習慣C 自主性C 責任感B 根気強さB 自省心B 向上心B
公正さB 指導性C 協調性C 同情心B 公共心B 積極性C 情緒の安定B

③交友関係

集団にとけこめず、いつもきまっている近所の友だちひとりと遊んでいる。その子が他の友だちと遊ぶと孤立的な存在となる。

④性 格

内気 引込み思案 自分から人前で話すことは全くない

(5) 総合的考察

本児の人格構造については、PFスタディの結果にあらわれているように、自己を他にに向かって強調し、自己の不満の解決を他に求めるといった外罰的傾向は極度に低く、ことさらに妥協しようとする、自己抑圧的な機制の働いていることが明らかになった。

幼児総合精神検査による3か年の性格検査の結果からも、このような人格構造を示すにいたった経過がうかがわれる。第1年次から第3年次までの叙述内容を検討すると、第1年次の叙述では、かなり発言量も多く、「お店やさんで何がいいかみているの」、「夜になったら……お家へはいりたくないから」など、多少感情の表出もみられるが、第2年次・第3年次になると、叙述は全く説明的になり、ことに第3年次においては、発言量が少なく、できるだけ、単純な説明的叙述ですませようとしている。しかも、叙述に対する意欲は全くみられず、発言を促しても答えない場面もあった。したがって、当然感情の表出などなされるはずもなく、自己を表現する意欲すら失なわれているかにみえるのである。このことは、PFスタディの結果にみられる外罰的傾向の極度に低いこと、および、妥協性・自己抑圧の強いことにつながると思われるが、その程度があまりに深いため、周囲に対して無関心になり、抵抗をできるだけ避けて、自己を環境のありのままのなりゆきにゆだねているといえるような傾向がうかがわれる。それが、結果的には、表面的な数値の上で社会適応度を高めているのであろう。PFスタディの反応語

に、「(ウソいって)許してよ」,「なんにもしてないよ(……とウソつく)」などの表現がみられることにも、抑圧され、ゆがめられた超自我の姿を感じるものであり、本児の基本的な欲求が満たされることなく、それが累積された結果、自分の欲求を率直に表明し、自己を積極的に強調する意欲まで失うにいたったものと思われるのである。

本児の現実の姿は、第2年次実施のソシオメトリック・テストの結果では、集団の成員から関心を払われない孤立児であり、小学校にはいった現在も、自ら進んで友だちの中にはいろいろとする気持ちがなく、孤立的な存在になりやすいという状態である。

本児の家庭は、職をたびたび替える父親と、二交替制勤務の職業をもつ母親、やゝ問題傾向のみられる一つ年上の兄の4人家族で、母親の権力が大きく、父親のかけがえがうすい。しかも、母親は、わがままな性格の人で、勤務が終わってからも、友だちと遊びに行くことがあり、本児は、両親のいない家で、兄とふたりで母の帰りをさびしく待つという状態である。そのため、本児は、しきりに母の帰りを気にするというので、典型的なカギっ子といえる。

本児のゆがめられた人格形成は、このような家庭・親子関係のあり方に由来するものと思われる。その後、担任教師の努力で、本児には明るさが少しずつみださるようになり、担任教師に、こっそり話しかけてくるようになった、とのことである。

(4) 社会適応度の高低による幼児の人格的傾向

P Fスタディの反応結果から求められるG C R % (社会適応度)を基準に、対象幼児を次の3群に分け、社会適応度が標準範囲から逸脱している(高すぎる場合と低すぎる場合)幼児について、その人格的傾向をみるとともに、幼児総合精神検査の図版叙述の反応結果(性格検査)を分析・検討する。これにより、幼児の人格・性格の側面に関する二つの検査の関連を検討する参考資料としたい。

社会適応度が低すぎる幼児群……G C R 41%以下(標準値-S D以下)の幼児 (以下、L群とよぶ)	(12名)
社会適応度が高すぎる幼児群……G C R 63%以上(標準値+S D以上)の幼児 (以下、H群とよぶ)	(15名)
社会適応度が標準範囲にある幼児群……G C R 42~62%(標準値±S D)の幼児 (以下、適応群とよぶ)	(25名)

表23は、上の3群について、P Fスタディの反応結果を比較したものである。

この3群について、各項目ごとに3群間の差を検定(χ^2 検定)した結果、いずれの項目にも有意差はみられなかったが、各群ごとに、標準値と比較してみると、()、()、()を付した項目に差がみられる。この表から、L群については、E % (外罰的反応)・O-D % (障害優位型)・E-E % (攻撃傾向)がやや高く、I % (内罰的反応)・N-P % (要求固執型)・I-I % (自責傾向)がやや低いことがうかがわれる。H群については、E % の標準範囲を越える低さで、N-P % (要求固執型)・E-E % (攻撃傾向)もやや低く、M % (無罰的反応)・M+I % (社会性・精神発達)が標準範囲を越える高さで、それらの傾向を示していることがわかる。

表24は、上記の3群について、幼児総合精神検査の叙述内容の反応を比較したものである。

表23 PFスタディの反応結果の比較

項目 群	人数	G C R %	プロフィール %						超自我因子 %					
			E	I	M	O I D	E I D	N I P	E	I	E + I	E I E	I I I	M + I
L 群	12	28.4	59.2 (+)	19.5 (-)	21.2	27.3 (+)	48.7	23.8 (-)	5.7	4.7	10.4	2.35 (+)	5.5 (-)	25.9
適応群	25	51.0	40.4	28.3	32.7	22.5	50.0	32.4	4.3	4.4	8.7	13.8	11.5	37.1
H 群	15	68.3	34.8 (-)	28.8	36.2 (+)	22.5	51.9	25.5 (-)	5.7	5.5	11.2	11.4 (-)	15.3 (+)	41.8 (+)

(注) 標準値にくらべて

- (+) は高いもの
- (-) は低いもの
- (±) は±標準偏差以上
のもの

表24 幼児総合精神検査の叙述反応の比較

項目 群	人数	欲 求				フラストレーション			異 常 反 応							
		(1) 愛情	(2) 社会	(3) 独立	(4) 知的	(1) 不安	(2) 攻撃	(3) 逃避	(1) 敵意	(2) 不満	(3) 執拗	(4) 拒否	(5) 劣等	(6) 孤立	(7) ひね	(8) 不安
L 群	12	8 (0.66)	2 (0.16)			13 (1.08)	7 (0.58)			12 (1.0)				1 (0.08)		1 (0.08)
適応群	25	17 (0.68)	6 (0.25)	3 (0.12)		19 (0.75)	7 (0.28)			14 (0.56)	1 (0.04)	1 (0.04)	1 (0.04)			
H 群	15	7 (0.47)	2 (0.13)	1 (0.07)		22 (1.47)	5 (0.33)			5 (0.33)			2 (0.13)	3 (0.20)		

数字は出現頻数 () 内は平均

L群, H群についての各項目ごとの平均反応出現数を, 適応群を基準に比較すると, L群には, フラストレーションの(1)不安・(2)攻撃, 異常反応の(2)不満の項目に関する反応の出現が比較的多く, H群では, フラストレーションの(1)不安の項目に関する反応の出現がかなり多いことがわかる。

これら二つの表にみられる結果から, 次のようなことが考えられる。社会適応度が低すぎる幼児(L群)は, 欲求不満や不安傾向をかなりもっており, これが, 外罰的反応(攻撃性)としてあらわれやすい傾向にあること, 社会適応度が年齢相応以上に高すぎる幼児(H群)は, 不安傾向をかなり強くもっているながら, それを攻撃的に外へ向けず, 自己を抑圧し, 妥協しようとする傾向に向かいがちなことである。以上のような点に関して, 二つの検査の関連が考えられる。したがって, 社会適応度(GCR%)が標準以上に低すぎる幼児, および, 高すぎる幼児については, 問題を内に潜めていることを考慮する必要があろう。

(5) ま と め

同一の幼児に、同時期に実施した二つの検査結果から、主として、幼児の精神発達と人格的傾向との関連をみようとしたのであるが、幼児総合精神検査の結果にみられる幼児の精神発達と、PFスタディの反応結果にみられる人格的傾向との間には、社会適応性・人格の成熟性に関して関連がみられることが明らかになった。

特に、社会性発達の劣る幼児については、その総合的な精神能力も劣り、人格的傾向に、外罰傾向が強く、妥協・忍耐の傾向や超自我の発達が劣り、社会適応度が著しく低いことが示され、全体として、人格の未熟性をあらわしていることが明らかになった。

社会性発達が停滞している幼児の人格的傾向については、外罰的反応が著しく低すぎる傾向がみられ普通にあらわれる正常な範囲内の反応からみると、かなり、かたよりのあることがわかった。

以上の結果から、仮説 2) 、および、仮説 3) は採択されるものと考ええる。

む す び

この研究は、幼児の社会性の発達に関する第3年次の研究として、幼児総合精神検査の3か年にわたる測定結果と、第3年次実施のPFスタディの反応結果とから、幼児の社会性の発達と人格形成に関し、分析・検討したものである。

本年度の具体的な研究目標は、1) 3か年の幼児の社会性・精神発達の様相の把握と就学前後の比較、2) 幼児の精神発達の傾向と人格的傾向との関連、特に、社会性発達の劣る幼児と社会性発達の停滞する幼児についての人格的傾向の検討、を行なうことで、そのために、三つの研究仮説を設定して、その検証を試みた。

研究の結果明らかになったことは、1) 3か年にわたる幼児の社会性・精神発達の様相から、就学前に比べ就学後の発達が全体として著しいこと、2) 幼児の精神発達と人格的傾向との間には、社会適応性・人格の成熟性に関して関連がみられ、特に、社会性発達の劣る幼児には、人格的に未熟な傾向がみられること、3) 社会性の発達が停滞している幼児には、その人格に、外罰的反応が極度に低いというかたよった傾向がみられること、などで、以上の結果は、設定した三つの仮説を、一応、裏付け、支持するものと考えられる。

これにより、幼児の社会性の発達とその人格形成との関連については、部分的に明らかになったと思われるが、幼児の人格形成過程の複雑さ、幼児の人格測定の困難さなどから、主観に即したじゅうぶんな解明はできなかったと反省している。対象幼児のひとりひとりについては、3年間観察してきた関係から、それぞれ固有の幼児なりの人となりをもって、3年の経過の中でその基本的な傾向は一貫して変わらないことを強く感じたのであるが、それぞれの幼児のおかれた環境の違いや、加えられる条件の違いによって、その具体的なあらわれ方は、個々に非常に異なってくるため、適切な処理の方法がみつからず、そうした幼児ひとりひとりの生き生きとした発達の姿、微妙な人格形成の過程を描き出すことはできなかった。対象幼児ひとりひとりの健全な成長発達を祈りながら、これらのことについての解明は、今後の課題としたい。

おわりに、この研究調査を実施するにあたり、積極的にご協力いただいた各小学校の校長先生、および、諸先生方に、深く感謝の意を表するものである。この研究を担当し執筆したのは池田要子である。

参 考 文 献

- | | | |
|-------------------|-------------------------|----------|
| 牛島義友・星美智子 | 「幼児総合精神検査」 | 金子書房 |
| 住田勝美・林勝造・一谷彊 | 「ローゼンツアイク人格理論」 | 三京房 |
| 住田勝美・林勝造・一谷彊 | 「ローゼンツアイク P-F スタディ使用手引」 | 三京房 |
| 戸川行男 | 「幼児・児童 絵画統覚検査解説」 | 金子書房 |
| 扇田博元 | 「絵による児童診断法」 | 黎明書房 |
| ゲルトルッド・マイリードヴォレッキ | 「幼児の人物画と心理」 | フレーベル館 |
| 波多野完治 | 「子どもの心 そのとらえ方・みちびき方」 | 大日本図書 |
| 滝沢武久 | 「子どもの思考のはたらき」 | 大日本図書 |
| 伊藤隆二 | 「幼児の知能と知能テスト」 | フレーベル館 |
| 山下俊郎 | 「改訂幼児心理学」 | 朝倉書店 |
| A・T・ジャーシルド | 「児童心理学」 | 金子書房 |
| 宮内孝 | 「幼児教育総論」 | 協同出版株式会社 |
| 山下俊郎・園原太郎 | 「保育診断講座」(1・2・3) | 黎明書房 |
| 教師養成研究会 | 「幼児の社会性指導」 | 学芸図書株式会社 |
| 波多野完治・依田新 | 「児童心理学ハンドブック」 | 金子書房 |
| 勝田守一・山住正己・松田道雄 | 「家庭の教育 2」 | 岩波書店 |
| ジョン・ポウルビー | 「乳幼児の精神衛生」 | 岩崎書店 |
| 園原丸郎・黒丸正四郎 | 「三才児」 | 日本放送出版協会 |
| アドラー | 「子どもの劣等感」 | 誠信書房 |